

想定外

中村 龍介

先の東日本大震災による原発事故を契機に「想定外」なるキーワードが定着し、今年の流行語大賞に選ばれるのはまず間違いのないと思われる。

「想定外」とは「考えもしなかった」、つまり通常の想定範囲からはかけ離れた事態を指す表現として使われている。換言すれば、「有り得ないことが現実のものとなる」ということだ。私のこれまでの七十年の人生を通じての世界観は、形あるものだけを信じる、所謂「唯物史観」で、神や仏は形式的に受け入れても心底から信じることはなかった。

しかし、思考の範囲を想定外の領域にまで広げてみると、これまで見えなかったものが見えてくるような気がする。

今年卒寿を迎えた作家の瀬戸内寂聴氏は文藝春秋五月号に寄稿して次のように書いている。

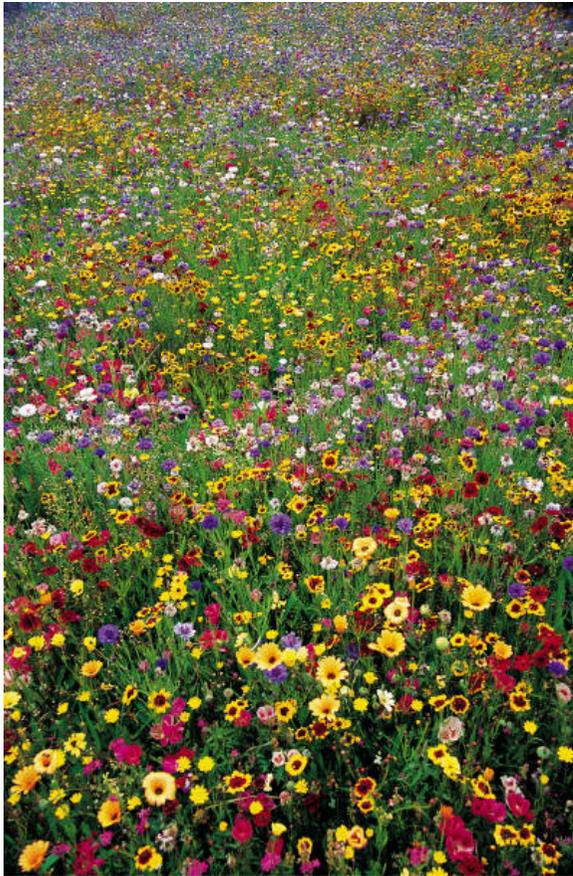
『私はある世を信じています。だから死は怖くない。やっと来たのかと、あの世の人は迎えてくれるでしょう。』

瀬戸内氏は五十一歳のとき仏門に入ったという。とすれば、この心境は仏の道を究めた末に到達できるものだろうか。

不遜なようだが、私も死を恐れているわけではない。あの世があるかどうかは別にして、死ぬことを眠ることの延長と捉えれば、特に恐怖を感じることはない。ただ、苦しむのは嫌だ。苦しまずに死に至る人為的方法として安楽死がある。ずっと昔に観た外国物の映画だが、ひとつの場面を今でもはっきり記憶している。

安楽死希望者が小部屋に入る。リクライニング・シートに深々と身体をあずけ、特殊なアイ・マスクをかける。眼前に映る画面を選択することができるのだ。その人は「お花畑」とBGMにベートーベンの交響曲六番「田園」を選んだ。

やがて、目の前に現れるのは、一面のお花畑。暖かな陽を受けて綺麗な蝶が飛び交う。田園の第二楽章が静かに流れ、その人はゆっくと花の中を進んでいく。音楽が終わるとき、彼は永遠の眠りにつく。



何という美しい最期だろう。何の苦しみもなく、安らぎの世界への旅立つことができるのだ。

出来ることなら、このような最期を望みたいが、安楽死は法制上も、社会的にも多くの問題があり難しい。更に宗教がからむと忽ちタブーとなる。キリスト教では神から授かった命は人間がそれを絶つことはできない。

幸か不幸か、日本はキリスト教国ではない。他の先進国に較べればハードルは低いはずだ。

日本が将来に亘って繁栄を続けていく上で最大のネックは少子高齢化である。国の医療費や年金は既に破綻状態にあり、国の借金はどんどん膨れ上がる。この悪循環に終止符を打つための秘策があるとすれば、それは安楽死を法制化することではないだろうか。私の予感では、必ずそういう時代が来ると思う。だが、その実現までには相当の時間を要するだろう。私は七十歳になったのを契機に遺言公正証書と尊厳死宣言公正証書を作成し、各一通を娘に預けた。死に支度は出来ている。が、安楽死が制度化されるまではとても待てない。だとすれば、瀬戸内氏に見習って、思考の範囲を想定外の領域にまで広げ、スピリチュアルな世界を模索する選択肢を真剣に考えるときが来たのかもしれない。

(了)

〔二〇一一年五月記 原稿用紙約四枚〕

課題「今思うこと」